

国語 試験問題

二月十日実施

注 意

- 一、試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、問題は余白をふくめ、十八ページにわたっています。
- 三、試験時間は五十分間です。
- 四、答えはすべて解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

京 華 高 等 学 校

受験番号

氏
名

余白

余白

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「わたし」（鈴木）の通う岩ノ松中学校では、川の清掃を通じて、ホタルが住める環境を取り戻そうとするボランティア活動を行っている。昆虫好きの吉岡さんが手を挙げるなか、「わたし」も手を挙げたいと考えていたが、吉岡さんと行動をともにすると、仲良しグループの遠藤咲に仲間はずれにされてしまうため、名乗り出ることができずにいた。「わたし」は吉岡さんに頼んで、表立って申し込みをせず、ボランティアに参加することを決めた。

1 「鈴木さんってさ、八方美人だって言われなない？」

パツと顔をあげる。吉岡さんは空を見たままだった。

そんなの、一度も直接言われたことはない。

だけどわたしの周りの人はきつと、わたしのことをそう思っているだろう。

咲の機嫌を取るためにいい顔をして、吉岡さんに対するグチだつてうなずきながら聞くくせに、吉岡さん本人の前ではニコニコ笑っている。そんな自分のことをきらいだつて思う。

2 ぽたり。わたしの頬から垂れた滴が水面に落ちた。それに驚いたのか、アメンボが逆方向に跳ねていく。

吉岡さんはわたしが泣いていることに気づいてため息をついた。

「ごめん」

「ううん、ほ、本当のことだから」

「……わたし、思ってることをよく考える前に言っちゃうんだ。昔からそうなの」

少しだけ震えた声。一瞬だけ吉岡さんも泣いているのかと思っただけけれど、そんなことはなかった。

むしろその逆で、彼女は笑っている。口の端が引きつった、とつても悲しい笑顔。

「どうしてもっと相手の気持ちを考えてしゃべれないの、って何回も怒られた。でも難しくて、気づいたら人を傷つけてて……それがきっかけで転校することになったんだ」

世の中には「人に合わせるのが苦手な人もいる」んだって、道徳の授業で習ったような気がする。それは病気にやなくて個性だって、小学校のときの担任の先生が言っていた。そのときは理解しはさずだったのに、今わたしは吉岡さんになんか

言ったらいいのかわからない。

「だから、わたしは全然優しくくないよ。人と話すときひどいことを言っちゃうから、今の学校では必要以上にしゃべらないようにしてるだけ」

ほほえみを崩さないままそう言った吉岡さんに、「そんなことないよ」と言いかけてやめた。だって、わたしは吉岡さんの考えを否定できるほど吉岡さんのことを知らないから。

「……でも、わたしは逆に言いたいことをなんにも言えないから、自分の考えていることをハッキリ言えるのってかっこいいなって思う」

それは心からの言葉。口に出してしまっただけからハツとする。

彼女はそれがコンプレックスなのだから、触れられたくない部分だったかもしれない。

あわてて謝ろうと口を開いた瞬間、

“ブーン”

「わっ!？」

耳元でなにかが飛んで、思わず声をあげる。

そんなわたしを見て吉岡さんも A。

「ハチだよ、ハチ」

「えっ、ハチ!? 逃げなきゃ!？」

「違う違う、ただのミツバチ。ほら」

ハチだなんて言うから、スズメバチのように毒のあるものを想像してしまった。吉岡さんが指さした先に飛んでいたのは、小さくて体も丸っこいミツバチ。

「なんだ……よかった」

ミツバチがめつたに人間を刺さないことくらい、わたしだって知っている。川べりに咲いていたピンク色の花に少しだけ止まって、それからまた音を立てて飛んでいった。

「意外と黄色くないんだね」

「黄色いのはセイヨウミツバチって言って、蜂蜜を作るのに飼育されてる種類。今のは黒っぽくて小さかったからニホンミツバチ」

早口で一気に説明してくれた吉岡さんにまた驚く。吉岡さん、本当に虫に詳しいんだ。

「今の……ニホンミツバチは蜜を集めないの？」

「集めるよ。女王蜂のために集めて、巣に帰る」

女王、という言葉を聞いて、わたしの頭の中にはまた咲の顔が浮かんできた。

咲が女王蜂、わたしは女王様のご機嫌がよくなるようにせつせと蜜を集める、下っ端の働きバチ。

そんなことを考えて、似合っているなと思ってクスツと笑ってしまう。

「なに？ 思い出し笑い？」

「ご、ごめん。……わたし、ミツバチみたいだなあって自分で思ってた」

なにも説明しなくても、吉岡さんにはその意味がわかったみたいだった。

ただ吉岡さんはうなづくことなく、そっと水面を指さす。

3 「……鈴木さんはミツバチじゃなくて、あれ」

そのままその場にしゃがみ込んだ吉岡さんの隣に自分もしゃがんで指の先を見る。

ピチョン、ピチョン。

水の輪っかを作りながら進んでいくのは、さつきも目に入ったアメンボ。

どうして？ と思いつながら吉岡さんのほうを向くと、彼女はメガネの奥の瞳をキラキラさせながらアメンボを観察していた。

(中略)

「あのさ。どうしてわたしがアメンボなの？」

ようやく理由を尋ねると、吉岡さんは B。

そして、「伝わらなかつたんだ」としよんぼりした声で言う。

「あっ、ごめん。わたしの理解力が足りないのかも」

「ううん。わたしが伝えるの下手だから。ちよっと待ってね」

首を横に振って腕を組み、真剣に考えはじめる吉岡さん。少しでも気持ちを汲めればと、これまでの会話を思い出しながら次の言葉を待った。

「鈴木さん、いろんな場所でうまく適応しながら生きてるじゃん。わたしとも、遠藤さんとも、うまくやってる。そういう

ところがアメンボに似てるって、言いたかったの」

思いもよらない理由にハツとする。

そんなの過大評価だ。わたし、そんなにすごい人間じゃない。

「……わたしはこんなふうには水を歩けてないよ。いつもおぼれてるようなもんだし」

なにを言うにも周りの目を気にして、顔色をうかがって。言うか言わないか迷っているときは、水の中でもがいているのと一緒だ。そんなわたしのことを、吉岡さんはアメンボに似ているのだという。

「うーん、なんか鈴木さんは、これからどんな場所に行っても、アメンボみたいに上手に歩いていきそうだなって思った」
どんな場所に行っても。その言葉でわたしは思い出した。

今まで、幼稚園でも小学校でも、クラス替えがあっても、クラスでひとりぼっちということにはなかった。嫌がらせをされたり面と向かって悪口を言われたりしたこともない。

それは、わたしが八方美人で相手に合わせて過ごしているから。

だけど吉岡さんはそんなわたしの性格を長所だと言ってくれる。そして。

「水の中でおぼれちゃうならさ、水の上を歩けばいいんだね。川でも、池でも、水溜まりでも。それができる鈴木さんがなんだかうらやましい」

その言葉を聞いた瞬間、ストンと、心の中になにかが落ちた。

今わたしがいるのは、暗くて濁っていて泳ぎづらい水の中。そんな「合わない」場所でもわたしは泳げる。吉岡さんが言ってくれたとおり、それはすごいことなのかも。

でも、無理して泳ぐことはない。わたしがいる場所は、ここだけじゃない。

別の場所でも、うまくやっていけるかもしれない……。

そう思ったら、だんだんと気持ち軽くなっていく。

わたしは水辺にそっと手を伸ばして、細長いアメンボに触れようとした。

その手に気づいたのか、逆方向へと跳ねていく。

きっと今、リーダーが作動して危険を察知したのだ。ほんの少ししか水面に触れていないのに、気づかれました。

すごい。そうつぶやくと、横で吉岡さんは

C

吉岡さんがまるで自分が昆虫代表のような言い方をするのがおかしくて、わたしも声を出して笑った。

「吉岡さんって、本当に虫オタクなんだ」

「オタクって……まあ、否定はしない」

「ふふ。ホタル、見られたらいいね」

「うん、でも五人も集まるかな。ただでさえわたし、クラスのみんなにきらわれてるだろうし」

真顔でそう言った吉岡さんに、言葉がつまる。

さっきのアメンボがまた水の輪を作った。

「……集めようよ。あと三人。わたしも頑張るよ」

なんのアテもないのにそんなことを言ったわたしに、吉岡さんは大きくまばたきをする。

「鈴木さん、本当に参加するの？ ボランティア」

「？ うん。今度はちゃんと申し込むから」

「……そっか」

その口元がかすかにゆるんでいたから、わたしはなんだかうれしくなる。

そして、わたしと吉岡さんは暗くなるまでたくさんの話をした。

吉岡さんは、お父さんが大学で生物学の研究をしていて、その影響で虫が好きになったこと。今住んでいる家は二丁目の動物病院の近くだけど、実は虫と違って動物はあまり好きじゃないってこと。話すのが苦手だと言っていたけれど、じつくりと話を聞いていけば嫌な発言なんて一つも出なかった。

家に帰ってスマホをチェックすると、咲たちとのグループラインにたくさんのメッセージが届いていた。どうやらわたしがなかなかレスポンスを返さないことに不満を持ったらしい咲が、何度かわたしの名前を呼んでいた。

いつもなら焦ってうまい理由を考えて打ち込むだろう。4 だけど今、どうしてか気持ちはおだやかだ。

深呼吸して一言だけ、グループにメッセージを入れる。

【わたし、ホタルのボランティアやることにしたんだ】

1. A C にあてはまる言葉として適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア 「でしょ？」と笑った

イ 「当たり前よ」と苦笑いを浮かべた

ウ 驚いた顔をして、そしてケラケラと笑った

エ 驚いたように目を見開いた

2. ——— 線部1に「パッと顔をあげる」とありますが、この時の「わたし」の心情として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 「八方美人」とは初めて投げかけられた言葉であるが、自分が隠してきた誰に対してもいい人を演じようとする本性を言い当てられて驚いている。

イ 自分自身が「八方美人」と言われることは初めての経験であるが、誰に対してもいい顔をしていることは自覚しているため凶星を突かれて戸惑っている。

ウ 自分では他者から「八方美人」と言われるような振る舞いを嫌悪しているが、実際に吉岡さんから指摘を受けて大きな悲しみに沈んでいる。

エ 自分が「八方美人」とあるという自覚はそれほどなかったが、その性格が友達である吉岡さんを傷つけていたことを知って困惑している。

3. ——— 線部2に「吉岡さんはわたしが泣いていることに気づいてため息をついた」とありますが、この時の吉岡さんの心情として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 他者に配慮することの大切さに気づきながらも再び過ちを犯した自分自身に憤りを覚えている。

イ 他者へ率直な意見をぶつけられるという自分の個性が理解されないことに悲しみを抱いている。

ウ 他者の気持ちを気にせず発言するという悪癖を自覚しながらも繰り返す自分自身に辟易へきえきとしている。

エ 他者との対話を控えると決めた矢先に不用意な発言をする自分自身の幼稚さにあきれてしまっている。

4. ———線部3に「そのままその場に……指の先を見る」とありますが、この時の「わたし」の心情を六十字以内で説明しなさい。

5. 次の会話を読んで(1)～(3)の問いに答えなさい。

京太…この文章には———XとYの二箇所「ハッとする」という表現がありますね。

華子…「ハッとする」という表現は、驚きや感動、気づきやひらめきといった心情を表す言葉ですよ。

先生…XとYの主体は「わたし」ですね。どのような心情なのか、少し考えてみましょう。

京太…Xは、「わたし」が自分自身の言葉に反応していますね。 I じゃないでしょうか。

先生…そうですね。ではYはどうでしょうか。

華子…Yは、吉岡さんの言葉に対して「わたし」が反応しています。 II に驚いているみたいですね。

先生…よく読めていますね。こうした気づきは、登場人物の心情の推移を捉えるために気をつけて読みたい部分ですね。

京太…そんな風に考えると、———Zの「ストーンと、心の中になにかが落ちた」という部分も「わたし」の心情の変化を表しているね。文章の終わりに向かって、「わたし」の心情はどのように変化しているんだろう。

華子… III と思うわ。

(1) I にあてはまるものとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 「わたし」が落ち込む吉岡さんを励まそうとしたつもりが、結果として彼女の考えを否定してしまった無礼さに気づいた描写

イ 「わたし」が純粹に吉岡さんへの憧れを口にしたつもりが、結果として彼女を傷つけかねない発言をした無神経さに気づいた描写

ウ 「わたし」が吉岡さんの偏った考えを否定しようとしたつもりが、結果として彼女の悩みを無視してしまった間抜けさに気づいた描写

エ 「わたし」が吉岡さんの相談に乗ろうとしたつもりが、結果として彼女の悩みを無視してしまった身勝手さに気づいた描写

(2) II にあてはまるものとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 吉岡さんが、人の顔色ばかりうかがっている「わたし」の性格を肯定的に捉えてくれていること

イ 吉岡さんが、他人に合わせてばかりいる「わたし」に対して真剣に向き合おうとしてくれていること

ウ 吉岡さんが、自分でも気づかなかった「わたし」の欠点を改善しようと尽力してくれていること

エ 吉岡さんが、本音で話すことのできない「わたし」の性格に対して憧れを持ってくれていること

(3) III にあてはまるものとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 「わたし」と実は似たもの同士であった吉岡さんと接する中で、自分の悩みが一人だけのものではないと気づき、前向きに物事を捉える余裕が生まれたんだ

イ 「わたし」と共通の悩みを抱く吉岡さんと接する中で、悩みを共有し補い合うことができるようになり、彼女との絆きずなを大切に思う気持ちが生まれたんだ

ウ 「わたし」と相反する特徴を持つ吉岡さんと接する中で、自分の短所を気にしてばかりではダメだと気づき、短所を補う長所を探す決意が生まれたんだ

エ 「わたし」と大きく異なる性格をした吉岡さんと接する中で、自分の短所を前向きに捉えることができるようになり、新しい一歩を踏み出す気持ちが生まれたんだ

6. ——— 線部4に「だけど今、どうしてか気持ちはおだやかだ」とありますが、「わたし」の心情の変化を説明したものととして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 吉岡さんの過去を知り、既存の人間関係に依存してばかりの自分自身に嫌気がさし、孤立することを恐れることなく自分の意志を他者に示すことができるようになった。

イ 吉岡さんの強さに触れ、自分がどのような環境でも力強く生きていけることを知り、これまで避けてきた他者との衝突を恐れずに積極的に行動することができるようになった。

ウ 吉岡さんの言葉を聞き、自分のさまざまな環境に順応できる性格を誇らしく思えるようになり、今の人間関係に固執することなく変化を恐れずに前向きに捉えることができるようになった。

エ 吉岡さんとの会話の中で、自分の本音を包み隠さず語り合うことの大切さを理解し、他者とよりよい関係を築くことを目指して対話することができるようになった。

7. この文章の表現の特徴として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 「アメンボ」をさまざまな場面に描くことで、揺れ動く「わたし」の心情が比喩的に表現されている。

イ 擬音語を効果的に用いることで、登場人物の心情をさまざまに想像できるように工夫されている。

ウ 二人の会話文を中心に物語が進むことで、次第に縮まっていく二人の距離感が読み取りやすくなっている。

エ 「……」を用いることで、登場人物の言葉にできない感情を読者が具体的に想像できるようになっている。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1

フェイクニュースの定義としては、このような真実性の欠如と正直さの欠如以外にもさまざまな観点が提案されてきた。たとえば、フェイクニュースの「ニュース」という言葉に着目して、「マスメディアが発信している本物のニュースを模倣している」ものがフェイクニュースだと考える立場もある。あるいは、その意図に着目して「広く伝播^{でんぱ}することを意図している」とか、その伝達媒体に着目して「インターネットやソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)において生じた現象である」点もよく挙げられる。これらはそれぞれインターネットという新たな技術やメディアによって可能となった情報発信の特徴をよく捉えており、フェイクニュースがなぜとりわけ現代的な課題であるのかを示している。

A、これらのうち、どの定義が正しいのだろうか。この問題に関しては現在でも論争中であるが、本書ではどれかひとつを「フェイクニュース」の定義とするのではなく、これらの特徴がゆるやかに重なり合い、交差し合う現象としてフェイクニュースを捉えてみたい。そこでヒントとなるのがL・ウイトゲンシュタインが提示した「家族的類似性」(Wittgenstein 2009)という概念である。

B、私は「ゲーム」という言葉の定義を知らない。それでも、将棋とテニスが似ていて、将棋とソリティアが似ていることがわかる。つまり、家族の成員、祖父・祖母、父・母、兄・妹などそれぞれ相互に類似しているように、「ゲーム」と呼ばれるものの特徴が相互に重なり合い、交差し合っていることをみてとることができる。それゆえ、すべてのゲームに共通する特徴を見出し^{みいだ}て、唯一の定義を与える必要はない。同様に、われわれは日々の生活のなかで「フェイクニュース」と呼ばれるさまざまな事例がもつ特徴の重なり合いをみてとることができ、その類似性の網の目のうちにフェイクニュースと呼ばれる現象が存在している。したがって、必ずしもその意味をひとつの定義に切り詰めて考える必要はない。

C 唯一の定義を与えないからといって、その言葉をどのように使ってもいいということにはならない。たとえば、「フェイクニュース」という語を頻繁に用いていたのはドナルド・トランプだが、彼はこの言葉をしばしば自分に批判的なマスメディアが発信する情報に対して使っていた。そしてこのような用法は、彼の支持者たちのみならず、他国の指導者のあいだにも広まっていき、ウクライナ侵攻後のロシアも、公式発表のなかでしばしば他国の発信を「フェイクニュース」と断じていた。このような使い方で「それはフェイクニュースだ！」と言われるとき、この言葉はその情報内容が間違っているという事実に関する主張をしているのではない。もしそうであれば、彼らはそれがなぜ間違っているといえるのか、証拠を集

めたり列挙したりして、真実を明らかにしようとするであろう。しかし、ほとんどの場合そのようなことは行われぬ。それは「この部屋は暑いね」という言葉が、部屋の温度についての事実を述べているのではなく（実際に部屋が暑いかどうかを問題にしているのではなく）、「クーラーを入れてくれ」という依頼や命令として使われる場合に似ている。つまり、ここの「それはフェイクニュースだ！」という発言は「やつらの言うことを信じるな！」という命令や勧告として使われているのである。このように「フェイクニュース」という言葉は、自分と異なる相手の意見を抑圧したりその発言を無効化したりするための道具として用いられる危険性をもっている。

(中略)

しかし、そもそもフェイクニュースはなぜ問題なのだろうか。もちろん、嘘をつくことや人を欺くことは倫理的によくないことである。しかしフェイクニュースには、それを発信する行為だけでなく、それが社会のなかで広まることにより生じる問題もあるように思われる。それはいったい何だろうか。

まず、真実ではない情報が広まることで、実際の被害が生じる。一般的に間違った情報をもとに行動すれば、さまざまな実害が発生する。たとえば、感染症についての間違った情報であれば、それは生命の危険をもたらす。誰かについての間違った情報が根拠のない誹謗中傷を呼びおこし、その人の人生を台無しにしてしまうかもしれない。

そしてそれは、ひとつの被害に留まるとは限らない。たとえば、われわれが物事を考える際に依拠する基本的な情報が間違っていると、そこから導かれる事柄も連鎖的に間違っていくことになり、結果としてさまざまな領域に間違った信念が増幅されていくことになる。つまり、誤謬ごびやうという病は伝染し、周囲に悪影響を及ぼしながら増殖していく。さらにこの誤った考えが、瞬時に、かつ、広範な情報共有を可能にするインターネットという媒体に載せられることによつて、社会的全体も瞬く間に誤謬に感染し、実害も拡大していく。これはもつともわかりやすいフェイクニュースの問題点である。

二つめの問題は、他者への信頼、とりわけ従来の知的権威への信頼が損なわれる点である。われわれは多くの情報を他人に依存して獲得しているが、フェイクニュースが蔓延まんえんすると、他人の言っていることを信じられなくなる。とりわけ深刻な問題となるのが、マスメディア、あるいは科学者に代表される専門家への批判と結びついたときである。実際フェイクニュースや陰謀論は、これらの知的権威への批判とセットになって発信されることが多い。

たしかに従来の知的権威*の失墜を「知の民主化」とみなすこともできるかもしれない。しかし実際に生じている状況は、知の民主化というより、知のアンキズムではないだろうか。あるいは、その空白の知的権威の座に、新たに登場したネット情報のインフルエンサーが座り、一般的に信じられている事実3に代わる「もうひとつの事実(alternative fact)」を提供して

4
いる。このような状況のなかで、われわれはいったい何を信じてよいのかわからなくなり、知的に不安定な状態に置かれることになる。

5
三つめの問題として、民主的な社会における意思決定の正統性が損なわれてしまう点が挙げられる。現在、多くの国や社会では、住民投票や選挙等の直接的・間接的な民主的手続きを通じて意思決定が行われている。しかしこのプロセスは、それぞれの社会の成員が政治的な問題に対する判断能力を具えていることを前提にするだけでなく、一人ひとりにある程度正しい情報が共有されていることをもまた前提にする。したがって、もしもこの前提が崩れるとすれば、民主的なプロセスそのものの信頼性が揺らぐことになり、決定された結果の正統性にも疑いの目が向けられることになる。この問題はさまざまなかたちで顕在化してきているが、それが問題として人々のあいだに共有されるきっかけとなったのは、二〇一六年、イギリスで行われたEU（欧州連合）離脱（ブレグジット）についての国民投票であった。その際、EU離脱派のナイジェル・ファラージによる「EUへの拠出金が週三億五〇〇〇万ポンドに達する」という発言がSNS上で拡散されたが、彼は投票後に、実際の拠出金がそれより大幅に少ない額であったことを認めた。この情報が実際の投票結果にどの程度影響を与えたのかはわからないが、もしも国家や自治体の行く末を決める集団的意思決定の結果がフェイクニュースに左右されるものだったとすれば、それは現在のわれわれだけの問題ではない。ひいては、未来を生きる子どもたちに対する責任という問題にもなってくる。

最後に、フェイクニュースによって人々が真理への関心を失っていく問題を挙げておきたい。もちろん、従来もさまざまな場面で間違った情報が伝えられることはあったが、これまでは少なくとも、間違った情報を伝えることはよくないことであり、情報の真偽は検証されなければならず、もしも間違っていると判明したら訂正する必要があると思われていた。例外は多々あったにせよ、従来のジャーナリズムは世の中で起こった新たな出来事を伝えるという意味でのニュースを発信する機関として存在しており、建前であれ何であれ、「真なることを伝えるべし」という規範を共有していたように思われる。

6
それに対して、ネット時代のフェイクニュースの発信者は、多くの場合このような規範を共有していない。そしてこの規範に関していえば、先ほどみた嘘をつく人としてたつたを言う人とは、後者のほうがより問題が大きい。たとえば、嘘をつく人は自分の主張に反する証拠を持ちだされれば、嘘を取り繕おうとしてその証拠を何らかの仕方でも否定し、反証、つまり反対の証拠を示そうとするだろう。この点で、嘘はまだ真実を検証するゲームの土俵に乗っている。それに対して、でたらめを言う人はそのような証拠に対して反証しようとさえせず、端的に無視する。つまり、真実を語る人と嘘をつく人は真実を検証するゲームのなかで反対の立場に立っているのに対して、でたらめを言う人はそもそもそのゲームの土俵に乗っていない。

ない。

このような真実に対する態度の違いは、でたらめを言う人を負けることのない「無敵」の状態にしてしまう。たとえば、将棋というゲームで「負ける」ことがありうるのは、お互いが将棋のルールに則^{のっと}ってコマを動かしているからであり、そのような共通のルールに従わずコマを自分の好きなように動かしている人は、負けることがありえない(もちろん、逆に「勝つ」こともありえない)。同様に、真実の検証ゲームの土俵に乗らない人はどんな証拠を持ちだされたとしても、そもそも証拠によって「負ける」ことはない。そこでは、もはや真実は何の規範性ももたなくなってしまう。

そして、もしもこのような態度が社会全体に蔓延していくならば、現在は物事の真偽に関心をもっている人々も、その関心を知らず知らずのうちに失っていき、真偽へのこだわりをもつ人のほうが少数派になっていく可能性がある。私がつとも恐ろしいと思うのは、もしかしたらこのような変化がすでに至るところで進行中なのかもしれないということである。

(山田圭一『フェイクニュースを哲学する——何を信じるべきか』による)

*アナキズム：ここでは無秩序な状態を指す。

1.

A

 \sim

C

 にあてはまる言葉として適当なものを、それぞれ符号で答えなさい。

ア では イ しかし ウ あるいは エ たとえば

2. ——— 線部1「フェイクニュースの定義」についての筆者の考えとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 真実性と正直性の欠如という観点から提案がされてきたが、フェイクニュースの事例にはそれぞれ類似性があり、その類似性の網の目の中にこそ実像があるため、一つの定義に切り詰めて考える必要はない。

イ 正しい情報を模倣し拡散することを意図しているものとして考えられているが、すべてのフェイクニュースと呼ばれる事例の特徴に共通点は存在しないため、一つの定義に切り詰めて考える必要はない。

ウ SNSという現代的なメディアから生じたものであると考えられているが、フェイクニュースの事例の類似性は昔ながらの家族の類似性を参考にすべきなので、一つの定義に切り詰めて考える必要はない。

エ 言葉や意図や伝達媒体などに着目してさまざまな観点が提案されてきたが、フェイクニュースはさまざまな事例同士が持つ類似性の中に実体が存在しているため、一つの定義に切り詰めて考える必要はない。

3. ———線部2「このような用法」とはフェイクニュースをどのように用いることですか。「くとして用いること」につながるように三十五字で探し、初めと終わりの五字を抜き出さない。

4. ———線部3に「これはもともわかりやすいフェイクニュースの問題点である」とありますが、ここで筆者はどのようなことを「問題点」として捉えていますか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア インターネットという情報媒体においては、虚偽の情報により単一の実害が生まれるだけでなく、関連する事柄の間で連鎖的に実害は続いていき、その範囲も急速に拡大していくこと。

イ インターネットという情報媒体においては、真実とは異なる情報が恐ろしい速度で広まるだけでなく、真偽の検証が難しく、一つの誤りからは想像ができないほど実害が増大していくこと。

ウ フェイクニュースが蔓延する社会においては、私たちが依拠する基本的な情報の信頼性が低下するだけでなく、誤った情報を盲信して他者を傷つけることにつながってしまうこと。

エ フェイクニュースが蔓延する社会においては、間違った情報を真実と誤認してしまうだけでなく、誤謬が誤謬を生み出す連鎖の中で真実が存在しなくなってしまうこと。

5. ———線部4「このような状況」とはどのような状況ですか。七十字以内で答えなさい。

6. ———線部5に「民主的な社会における意思決定の正統性が損なわれてしまう点が挙げられる」とありますが、その理由として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア フェイクニュースが注目を集めることにより、情報社会に生きている人々に求められる判断能力を著しく低下させてしまう危険性があるから。

イ フェイクニュースによって世間に嘘が発信されることにより、民主的なプロセスを経て決定した結果の正当性がまったく信用されなくなってしまうから。

ウ フェイクニュースが広まっていくことにより、専門家の批判や陰謀論が流布されて政治的な問題に対して正しい判断をすることが困難になってしまうから。

エ フェイクニュースが真実を歪めてしまうことにより、個々人に正確な情報が与えられているという現在の民主主義を支える前提が崩れてしまうから。

7. ———線部6に「嘘をつく人とでたらめを言う人とは、後者のほうがより問題が大き」とありますが、その理由を説明した次の文章の I ～ IV にあてはまる言葉を、それぞれ指定字数で抜き出しなさい。

「嘘をつく人」は自身に反対してくる人に対して、 I (二字) を試みようとする時点で II (十字) の枠組みの中にいるが、「でたらめを言う人」は、 III (五字) に対するこだわりなく、 II の枠組みの外側にいる。そのような人が増えていくと、社会全体が IV (六字) をなくしてしまう危険性があるから。

